

那須野が原博物館 中期目標項目・自己評価シート
第1期(平成24～28年度)

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	28年度目標値(5か年)	24年度目標値	24年度実績	備考	
1. 資料の収集と保存・活用							
1-1 資料の収集	収集方針をもとに寄贈・購入・採集を通して積極的かつ継続的に収集します。	収蔵資料総件数	65,047件	63,354件	66,413件	H25.3.31現在 歴史16,404件、民俗 5,172件、考古4,284 件、美術2,833件、文学 34件、地学364件、植 物4,984件、動物32,338 件 合計66,413件	
		新規収集資 料件数	歴史(寄贈を除く)	65件	13件	171件	養蚕関係資料ほか
			民俗(寄贈を除く)	0件	0件	0件	
			考古(寄贈を除く)	0件	0件	0件	
			美術(寄贈を除く)	91件	18件	11件	錦絵
			文学(寄贈を除く)	25件	5件	1件	初版本
			地学(寄贈を除く)	150件	30件	20件	化石標本
			植物(寄贈を除く)	250件	50件	0件	
			昆虫(寄贈を除く)	1,500件	300件	58件	海外産甲虫類
			動物(寄贈を除く)	35件	7件	3件	鳥類
			寄贈他(全分野)	—	—	3,298件	植物510件、昆虫2,192 件、動物(昆虫以外)7 件、歴史582件、民俗 10件
		合計	2,116件	423件	3,730件		
		収蔵図書総件数	12,482件	12,362件	12,730件	H25.3.31現在 12,730件	
新規収集図 書件数	購入	150件	30件	32件			
	寄贈・その他	—	—	368件			
1-2 資料情報の公開	収蔵資料データベースの公開を行い、研究者等による利用を促進します。	収蔵資料情報公開件数	10,000点	2,000点	9,352点	s-net登録件数(自然資 料 加賀谷トンホ 類コレク ション)	
1-3 資料の適切な管理	必要な収蔵スペースを確保するとともに、収蔵庫・展示室を良好な環境に保ち、燻蒸により資料の安全な保存を図ります。	燻蒸回数	那須野が原博物館	5回	1回	1回	
			附属施設	5回	各1回	各1回	黒磯郷土館(展示施設 1回・旧津久井家住宅1 回)
		収蔵庫の増設				26年度設計 27年度本体工事 予定	
		資料の修復	歴史資料	50件	10件	0件	
考古資料	25件		5件	2件			
	資料の修復等を行い、資料の保存状						

	態を改善します。	美術資料	5件	1件	0件		
		美術資料(ブロンズ化)	3件	1件	0件		
1-4 資料の活用	常設展示・企画展示等による資料の利用・公開を促進します。	展示利用率	常設展示	1.0%	1.0%	0.9%	展示件数合計／総収蔵件数
			企画展示	5.0%	5.0%	1.1%	Σ [(展示件数÷該当分野収蔵件数)×100]÷展示回数
			トピックス展他	1.0%	1.0%	1.0%	Σ [(展示件数÷該当分野収蔵件数)×100]÷展示回数
			黒磯郷土館	1.0%	1.0%	1.0%	展示件数／収蔵件数
			日新の館	0.5%	0.5%	0.5%	Σ [(展示件数÷該当分野収蔵件数)×100]÷展示回数
			関谷郷土資料館	1.2%	1.2%	1.1%	展示件数／収蔵件数
	収蔵資料を他の博物館・美術館等へ貸し出します。	貸出回数	—	—	9回	東京芸大美術館・国立歴史民俗博物館・長野市立博物館・なす風土記の丘資料館・栃木県立美術館・馬頭郷土資料館・栃木県立博物館(2回)・旧新橋停車場鉄道歴史展示室	
【特記事項】	収集資料数は、寄贈資料の点数が多かったため目標を大きく上回った。歴史資料の修復、彫刻のブロンズ化は予算化できなかった。縄文土器は、東日本大震災で破損したものの優先で修復を進めている。資料の展示利用では、館蔵資料を利用しない展示(地球観測衛星「だいち」・石の上にも3億年・那須をとらえるⅡ)があったため、利用率が低くなっている。福島県双葉町所蔵剥製標本21点を受入れ、一時保管を行っている(平成26年度末まで)。						
【課題・改善点等】	今後も資料の収集は継続するが、収蔵施設のスペース的な限界が迫っているのが現状。収蔵施設の増設を実施計画に計上している。						
【外部評価委員 所見】	那須野が原の自然・文化の特性を踏まえての資料収集・整理・保存活動がなされていることは、今までの実績を通して高く評価できる。歴史資料や美術作品の修復は、資料の価値の保持という観点とともに、このたびの東日本大震災が訴えている文化財保護の重要性を考えると、継続的かつ早急に対応しなければならない。文化力こそが地域力であるという認識に立つ必要がある。収蔵庫の増設については、現状からみて早急なる対応が必要である。なお、資料活用の項目にある展示利用率は、数値目標としての意味を持ちえないので、削除してもよいのではないかと。資料の利用点数や利用施設等を入れて、実数での評価方法が現実的ではないか。						
2. 調査研究							
2-1 調査研究活動の推進	那須野が原およびその周辺に関する調査研究、並びに博物館学的調査研究を積極的に行います。	那須野が原博物館紀要掲載論文の件数	25件	5件	6件		
2-2 地域研究者等との協働による調査研究の推進	地域研究者を客員研究員に委嘱し、幅広い分野から調査研究を行います。	客員研究員数	10人	2人	1人		
	那須を綴る事業を実施し、地域研究者による那須地方の研究成果を公開します。	地域研究者数	15人	5人	4人		
【特記事項】	那須を綴る事業では、4人の研究者が出版物、展示、講演(セミナー)の3つのアプローチで研究成果を発表した。						

【課題・改善点等】	那須を綴る事業は、展示の入館者数が極端に少ないことや、扱う分野(テーマ)としての幅を広げるため、今後展示においては行わないこととする。それに伴い、出版物・セミナーの実施主体を「那須文化研究会」に変更し、館としてはセミナーを共催の形で実施する。客員研究員については、そのあり方について見直しをする。必要であれば客員研究員に代わる新たな制度設け、より幅広い研究者との協働による調査研究を推進する。紀要については、より充実したものにして行く。						
【外部評価委員 所見】	専門的知識を有する市民を客員研究員とした制度や自然・文化セミナーの開催などを通して、地域文化を掘り起こし、その成果を博物館紀要等に記録化している活動は、那須野が原博物館が掲げる市民との協働を図る事業として評価できる。しかし、「那須を綴る」事業は、やや専門的すぎて市民に伝わりにくかったようである。今後は、講座や出版活動によって、地域還元を図り広く市民に発信する活動が望ましい。						
3. 展示							
3-1 企画展示の開催	収蔵資料の有効活用を図るとともに、地域または各分野のテーマを深く理解するため、企画展示等を開催します。	企画展示の開催回数	25回	5回	6回		
		企画展示の観覧者数(学校を除く)	66,600人 (H28年度16,000人)	10,900人	12,096人	目標値:過去5か年のうち最多・最小を除く3か年の平均×1.1	
		観覧者の満足度(平均)	90%	90%	84%	5段階評価のうち、上位2位の合計	
3-2 企画展示の理解促進	図録の発行、記念講演会・展示解説等の開催により、観覧者が展示内容を理解しやすいようにします。	図録の発行件数	5件	1件	1件	生態図鑑『塩原の自然』	
		関連事業の参加率	70%	60%	70%		
		参加者の満足度(平均)	90%	90%	98%		
3-3 常設展示の充実	常設展示の充実を図ります。						
	開館10周年に展示リニューアルを行います。				H25当初予算に計上		
【特記事項】	6回の企画展示(特別展:塩原の自然、移動展:石の上にも3億年、企画展:地球観測衛星「だいち」、昭和のくらし、那須をとらえるⅡ、むかしの温泉風景)を開催。H24年度観覧者数:18,471人(うち学校見学5,796人)・利用者数38,908人。						
【課題・改善点等】	科学や化石・民俗などのテーマを対象とした展示は来館者が多く、地域を対象とした展示は少ない傾向が見られた。地域を対象とした企画でも、事前調査の結果初めて得られた知見などを全面に打ち出し、魅力の向上に努める。						
【外部評価委員 所見】	テーマの特性や内容を踏まえた開催時期や期間を考える必要がある。自然系の展示は春から夏の時期が望ましい。冬期間は、外に出る意識が低くなる時期であるが、展示内容の工夫によって、博物館の活動が理解できる機会であろう。また、展示解説(ギャラリートーク)への参加者が少ないので、広報等の工夫・改善が必要である。						
4. 教室講座							
4-1 教室の実施	子ども・親子を対象に各種教室を開催し、体験を通じた学習活動を展開します。	参加率	90%	85%	87%	土器70%、昆虫133%、化石85%、科学45%、ほかおり100%	
		参加者の満足度(平均)	90%	90%	97%		
4-2 講座の実施	一般を対象に講座を開催し、地域の自然・文化に対する認識を深めます。	参加率	70%	60%	98%	セミナー107% 自然講座88%	
		参加者の満足度(平均)	90%	90%	95%		
4-3 博物館フェスタの実施	博物館をより身近に感じていただくために博物館フェスタを開催します。	来館者数(延べ)	1,200人	1,200人	1,061人		
		参加者の満足度(平均)	90%	90%	%	回収なし	
4-4 親子体験チャレンジの実施	創作活動を通じて、昔のくらしや自然科学への理解を促進します。	参加率	70%	60%	41%	24回実施	
		参加者の満足度(平均)	90%	90%	94%		
4-5 各種普及事業の実施	シンポジウムや研究発表会を開催し、市民とともにこれからの地域のあり方	参加率	70%	60%	70%		

4-6	生涯学習活動の支援	市民とこの市にこれからの地域づくりを探ります。	参加者の満足度(平均)	90%	90%	91%	
		質問や相談等に対応し、市民の生涯学習に寄与します。	レファレンス件数	100件	20件	13件	同定依頼、地域史、収蔵資料等
	【特記事項】	一般を対象に、那須自然・文化セミナー「那須をとらえるⅡ」、那須塩原自然講座「塩原地区の特徴と自然環境の保全」を開催。子ども・親子対象の教室として、土器づくり・昆虫・化石・科学・はたおりの5コースを実施。チャレンジは前年度から4回減らし24回実施した。					
	【課題・改善点等】	継続的に実施してきた事業については、内容の精査と長期的な展望・方向性を検討する必要がある。チャレンジは参加率が減少傾向のため、チラシの配布エリアを拡大するなど、広報体制を強化したい。					
	【外部評価委員 所見】	那須野が原博物館の運営・活動方針を具現化した事業として評価できる。親子体験チャレンジ事業は、参加者の満足度は高いが、参加者が少ない。那須塩原市内への広報の徹底と、チラシなどを那須塩原市周辺へ拡大するのも、一方策である。教室・講座については、学校や社会教育機関との連携を進める必要がある。					
5. 地域との連携							
5-1	各種機関等との連携・協力	各種機関等と連携を図り、広範囲な活動を展開します。	連携事業件数	20件	4件	5件	ビクター展示、広報連載、フィルム、コンサート、環境企画展
		文化・自然に関する活動に対し、学術的な協力をを行います。	協力件数	30件	6件	6件	生涯学習課、環境管理課2人、栃木県(文化財、歴史の道)、さくら市
5-2	学校教育との連携	学校による見学・体験学習の充実を図るとともに、収蔵資料の貸出し・出張授業等により学校教育の支援を行います。	学校来館数(那須野が原博物館)	500校	100校	120校	
			学校来館数(黒磯郷土館)	25校	5校	7校	
			資料貸出件数	75件	15件	32件	ビデオ22件、民具4件、開拓2件、考古2件、化石1件、古写真1件
			出張授業件数	50件	10件	7件	開こん記念祭5件、自然観察1件、郷土学習
5-3	実習等の受け入れ	博物館実習や生徒の職場体験等を受け入れます。	博物館実習・職場体験件数	50人	10人	21人	博物館実習5人、マイチャレ 7人、作新高9人
	【特記事項】	博物館の学校来館数はH23年度と比較して2割弱増加。ミュージアムコレクションの広報連載は3年間で終了。今年度初めて8月に高校生のインターンシップを受入れた。					
	【課題・改善点等】	学校教育との連携は、H20年度に博学連携資料集を発行したが十分に活用されていない状況にあり、今後の対応を検討する。					
	【外部評価委員 所見】	郷土資料館時代から実践してきた運営・活動について評価できる。しかし、学校教育や社会教育にに対する地域意識が変容してきている。現状を踏まえながら、教育系施設や異業種との連携などを進める必要がある。					
6. 市民との協働							
6-1	市民との協働	「那須を綴る」事業により、市民による調査・公開・編纂を進めます。		3回	1回	1回	1回/2年
		団体・研究者等との協働により、資料や情報の収集を図ります。					
		ボランティア活動を支援し、市民による教育普及活動を促進します。					
	【特記事項】	学校支援ボランティア「石ぐら会」や「いろりの会」、親子体験チャレンジ等のボランティアの教育普及活動を支援している。					
	【課題・改善点等】	各団体・研究者の研究成果について、博物館がどのように共有していくかが課題となっている。教育普及活動について、博物館と各団体が連携してよりよい学習につなげていく必要がある。					

【外部評価委員 所見】		那須野が原博物館の運営・活動と連携した自主団体活動は定評がある。特に「石ぐら会」や「いろりの会」は、次世代を担う子どもたちの郷土理解学習に尽力して成果を上げている。しかし、研究団体の調査研究活動成果を博物館運営と結びつける機能が果たせていない。企画展等に反映できる資料収集や調査研究の連携・工夫が必要である。また、企画・運営にも参加できる「博物館協力員」制度などにより、学芸員の労力軽減化を量れないものか。なお、「5.地域との連携」と「6.市民との協働」は、評価の対象や内容が似通っていると感じる。一本化できないか。				
7. 施設整備						
7-1 施設の維持管理	施設を安全かつ快適な環境に保ち、資料の適切な保管環境を整えます。	施設の清掃、空調設備のメンテナンス及び更新				
7-2 危機管理体制の強化	自然災害や火災・盗難・事故等に備え、防災意識の向上と危機管理体制の強化を図ります。	防災訓練の実施回数	10回	2回	2回	
		危機管理体制の整備状況				
7-3 附属施設活動の充実	附属施設(黒磯郷土館・日新の館・関谷郷土資料館)の特徴を活かした活動を展開します。	黒磯郷土館来館者数	1,800人	1,800人	2,366人	
		黒磯郷土館来館者の満足度(平均)	90%	90%	%	回収なし
		日新の館来館者数	1,500人	1,500人	1,474人	
		日新の館企画展の開催回数	25回	5回	5回	高久靄匡展・人形展・靄匡と隆古展・峰村北山展・錦絵展
		日新の館来館者の満足度(平均)	90%	90%	100%	
		関谷郷土資料館来館者数	14,000人	14,000人	15,035人	
		関谷郷土資料館来館者の満足度	90%	90%	%	回収なし
【特記事項】	施設の清掃、メンテナンス等は計画的に実施している。黒磯郷土館にて宿泊体験・昔のおもちづくり、日新の館にて5回の企画展、草木染め体験(述べ5回)・美術品取扱体験を開催。					
【課題・改善点等】	空調設備などの機器に経年劣化が見られ、計画的に修繕・交換を行っていく必要がある。また、附属施設については、事業の見直し(日新の館)も含めて、今後の方向性を検討して行く。					
【外部評価委員 所見】	施設の整備は、来館者が気持ちよく見学でき、過ごせる空間を維持するために、重要なものである。その評価が、展示や講座等の評価とともに、博物館を評価するベースとなる。一方で、資料の保全の観点からも収蔵庫の増設は欠かすことのできない問題である。また、防災訓練などの日頃の訓練が、いざという時に人命を守り、資料を守ることになる。施設のメンテナンスとともに強化してもらいたい。					
8. 組織人員						
8-1 効率的な組織運営	情報の共有化や事務事業の分担を促進し、効率的な運営に努力します。					
8-2 意識改革と資質の向上	職員全員が当館の使命及び目標を認識するとともに、能力開発・資質向上に努めます。					研修参加:文化庁主催1名、日博協主催2名
8-3 効果的な広報体制	各種メディア等への情報提供を積極的に行います。また、ホームページを充実し、認知度の向上を図ります。	マスコミ・メディア等の掲載回数	100回	20回	47回	新聞33回、情報誌10回、ラジオ1回、テレビ3回
		ホームページの閲覧回数	300,000回	60,000回	74,346回	
		ホームページの更新回数	240回	48回	52回	
【特記事項】	定期的に打合せ等を行い、目標や問題意識の共有を図っている。広報は、市記者クラブへ情報提供しているほか、新聞、情報誌等へ広告を掲載している。					
【課題・改善点等】	広報については、情報提供の方法やタイミング、アピール性の高いイベントをセットで広報するなど工夫する必要がある。					

【外部評価委員 所見】

付属施設を含めて、学芸員・事務職が不足している。文化施設は、市民に最も近い位置にあるがゆえに、行政の在り方が問われる施設である。学芸員・事務職ともに充実を図り、市民サービスの向上に努められたい。

【外部評価委員 総合所見・指摘事項】

福島県双葉町所蔵の剥製標本の受け入れは、東日本大震災が訴えている地域文化の保全・継承の重要性に対してすぐに応えた活動として、高く評価する。併せて、那須野が原博物館の被災した資料・作品の修復においても、早急かつ継続的に進めていただきたい。資料の収集・整理・保存については、収蔵庫の容量や環境の保全が図られてこそである。那須野が原博物館が保有する資料の保全を保証するうえからも収蔵庫の増設を速やかに実施していただきたい。教育普及活動については、関係機関との連携強化や活動の見直し、効果的な広報体制を図るなど活性化に努められたい。企画展は、市民に対する教育普及において重要な事業である。市民の期待に応えられる内容にするためにも、内容の充実を図り、計画的に進めてもらいたい。併せて、専門職員等の増員についても、今後の博物館活動を占うものであり、要望願いたい。また、市民との協働は今後益々重要な課題となろう。協働の在り方等について、今後も十分なる意識を持って臨んでもらいたい。

【博物館の対応】

那須野が原博物館は、このたびの東日本大震災に対して、文化財レスキューという立場で、宮城県・岩手県・福島県において、活動を行ってきた。福島県においては、まだまだ緊急の文化財救出が残されている。今後も、積極的に関わって行きたいと考えている(レスキュー活動については、館職員全員が日本博物館協会の活動への登録をしている)。収蔵庫の増設については、実施計画に上げ、実現を図って行きたい。資料・作品の修復については、被災した資料を優先的に、また通常の修復資料も考慮しながら、計画的に実施して行きたい。一年間の企画展示の計画において、冬季の期間は次年度の計画や資料整理野など、少ない人数で全体の事業を推進するために、メリハリのある展示・事業としたい。市民との協働については、長年活動をしてきたつもりであるが、現在の社会状況の変化をとらえ、また協働の在り方を再度捉えなおして、地域活動の一つとして活動が推進できるよう、まさに市民と博物館とが交じり合いながら、進めたい。なお、中期目標項目・自己評価シートにおいて指摘された1-4の資料の活用中の展示利用率は、次回から利用率でなく利用点数を入れていきたい。また、「5.地域との連携」と「6.市民との協働」の一本化については、それぞれに重要な課題ではあるが、併せた形にしたい。ただ、今後拡充された段階においては、戻すことも考えたい。